



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

### ホンダジェット（A）

5

#### —これまでの業界の常識への挑戦—

2015年12月23日、本田技研工業株式会社（以下、ホンダ）の航空事業子会社であるホンダエアクラフトカンパニー（Honda Aircraft Company）は、先進小型ビジネスジェット機、ホンダジェット（HondaJet）HA-420の顧客への引き渡しを開始した。10

ホンダジェットは最大7人乗り（操縦士1名含む）で、双発の小型ビジネスジェット機である<sup>[1]</sup>。ビジネスジェット機市場の新しい市場である小型（ベリーライト〔Very Light〕及びライト〔Light〕）ジェット機市場を狙っていた（ホンダジェットの外観・内観ならびにサイズ・レイアウトは図表1、図表2参照）。機種名にある420という数字は、最高巡航速度が約420ノット（約毎時780km）であることを示しており<sup>[2]</sup>、ライバル機に比べて高速を誇っていた。航続距離は2,300km弱で、東京からでは台北、北京まで、あるいはニューヨークからマイアミまで飛ぶことができる。15

その引き渡しの開始は、バイクや自動車を主な事業分野としてきたホンダにとって、航空機事業の本格的な立ち上げに向けた第一歩であった。ホンダの航空機事業の収益は、1機につき490万ドル（2017年価格、1ドル110円の為替レート換算で約5.4億円）となる機体販売収入のみならず、販売後<sup>20</sup>のメインテナンス・サービスが収益を支えることになる。さらに、（後述のように）航空機業界の常識を変えたホンダジェットは、ホンダのブランド価値の向上や他のホンダ商品への技術波及効果などにも貢献する。

ホンダジェットは、主翼上面にエンジンが配置されているという独特なスタイルのみならず、優れた機内居住性と高い性能（高速、低燃費など）で、製品化の発表後の初の展示会（2006年）では大き25

<sup>[1]</sup> 双発機は、左右両側の主翼それぞれにエンジンを搭載した機。

<sup>[2]</sup> ホンダジェットHP（<http://www.honda.co.jp/jet/performance/>）参照【2017年1月アクセス確認】。

このケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科 研究員 近江和明（M37）ならびに教授 中村 洋が、公表資料ならびに藤野道格氏をはじめとするホンダジェット関係者、田上勝俊氏（本田技研工業株式会社、基礎研究所初代所長）へのインタビューに基づいて作成した。また、網野俊賢氏（元ホンダ・オブ・アメリカ執行副社長）からの多大な協力をいただいた。なおこのケースは経営の巧拙を例示するものではない。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright © 近江和明、中村 洋（2017年5月作成）